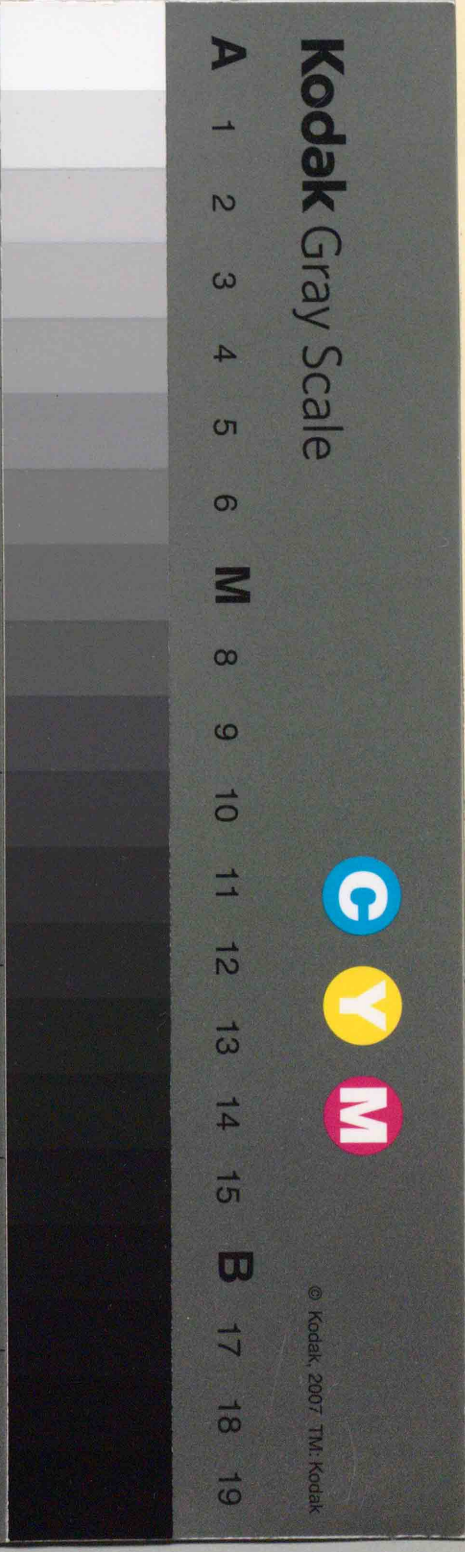
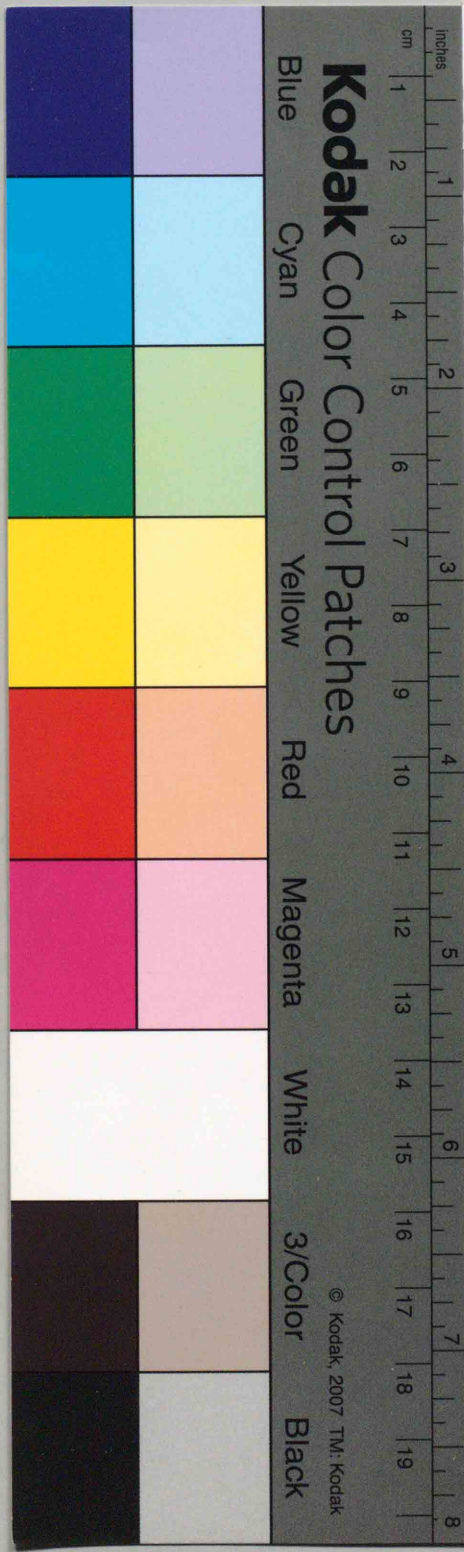
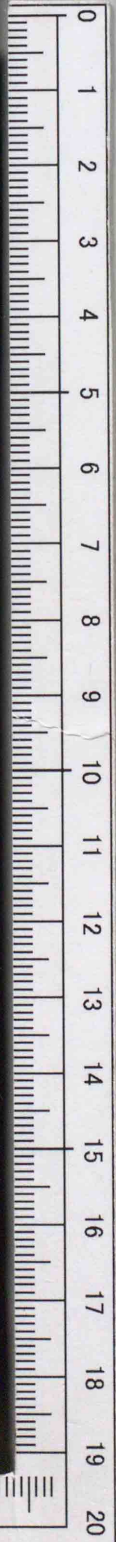


3759  
Mo14  
資料室

尋常  
小學  
國語讀本  
卷七

文部省

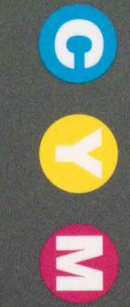


41664

教科書文庫

4
810
31-1928
20000 25634

200030  
2744



© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

375.9  
M014



尋常  
小學

國語讀本

卷七

文部省

喜野三三

喜野三三

もくろく

第一	世界	一
第二	長き行列	四
第三	横濱	七
第四	潮干狩	九
第五	れんげさう	十六
第六	鎌倉攻	十八
第七	傘松	二十二
第八	馬	二十五
第九	大阪	二十八
第十	獅子と武士	三十
第十一	初夏の夜	三十四
第十二	大連だより	三十五
第十三	一太郎やあい	四十
第十四	川中島の戦	四十三
第十五	中なほり	四十五
第十六	カチ屋	四十九
第十七	航海の話	五十二
第十八	安倍川の義夫	六十一
第十九	木下藤吉郎	七十六
第二十	海ノ生物	七十九
第二十一	動物	八十四
第二十二	植物	八十八
第二十三	マリイのきてん	九十二
第二十四	二百十日	九十五
第二十五	助力	九十七
第二十六	加藤清正	九十八
第二十七	彼岸	百八
第二十八	電報	百九
第二十九	注文	百十三



大島教書印

第一 世界

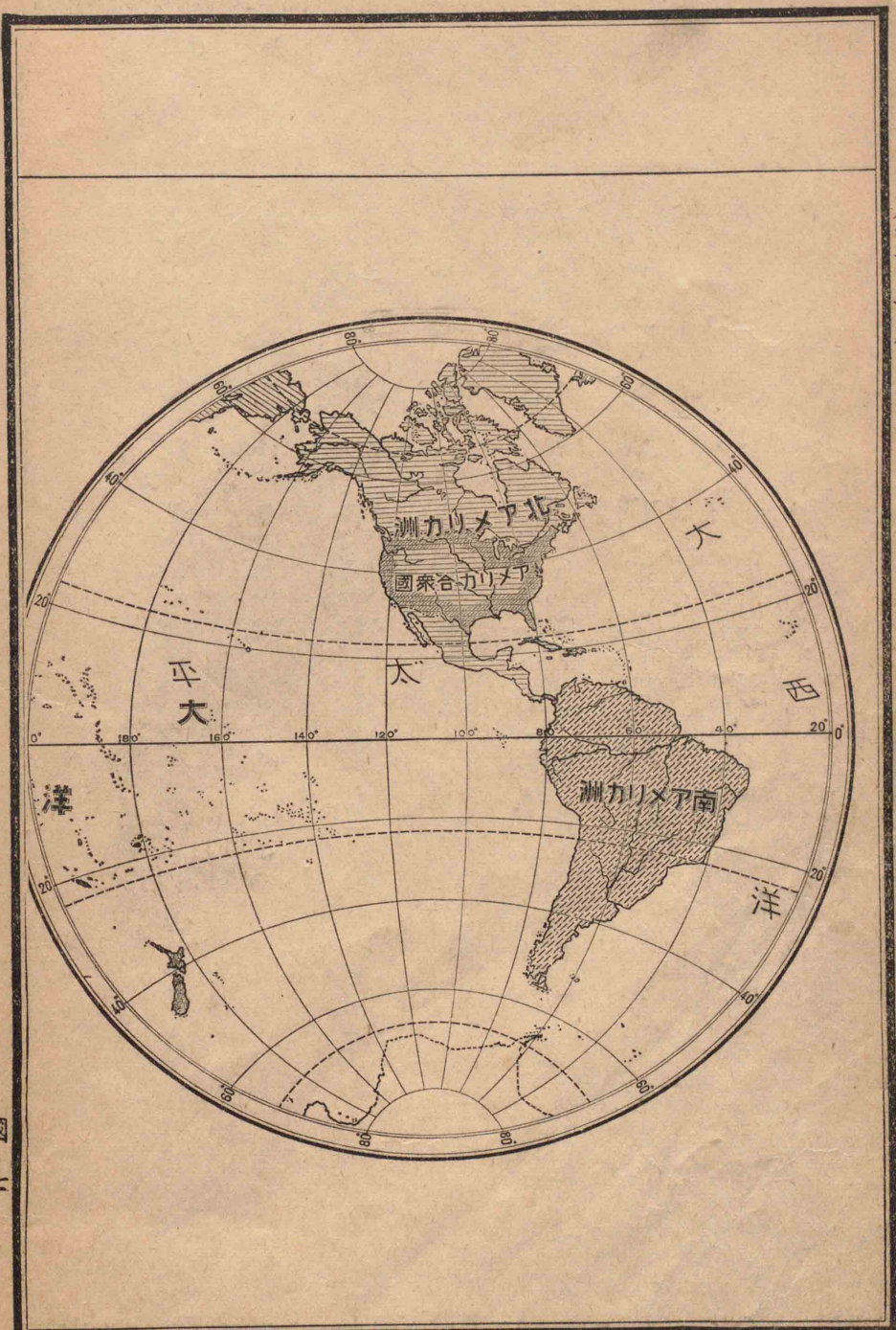
われらが住む世界は、其の形まるくして、球の如し。ゆゑに之を地球といふ。

地球の表面には、海と陸とありて、海の廣さはおよそ陸の二倍半なり。

海を分けて太平洋・大西洋・印度洋とし、陸を分けて、アジア洲・ヨーロッパ洲・アフリカ洲・南アメリカ洲・北アメリカ洲及び大洋洲とす。我が大日本帝國はアジア洲の東部にあり。

球形地球表 太平洋及部

第一 世界



地球の上には大小合はせて六十餘國あり。其の中我が大日本帝國と、イギリス・フランス・イタリヤ及びアメリカ合衆國を世界の五大強國といふ。

第二 長き行列

一年生を先頭に、  
 二・三・四・五・六年が  
 四列になりて歩く時  
 全校生徒の八百は

行

八十間もつゞくなり。  
 日本中の小學生、  
 八百萬人ありといふ。  
 八百萬の小學生、  
 四列になりて歩かんか、  
 八十萬間つゞくべし。  
 君、此の長き行列の  
 中の一人は君にして、

中の一人は僕なるぞ。

日本中の小學校、

三萬近くありといふ。

三萬近き學校に

分れて學ぶわれくの

望に向ふ足なみは

皆一せいにそろふなり。

世界に比なき帝國の

比 望 學

御

強き御民となるべしと。  
強き御民となるべしと。

第三 横濱

横南 貿易港

横濱は東京の西南八里半の所にある一大貿易港にして、商船の出入たゆる時なし。

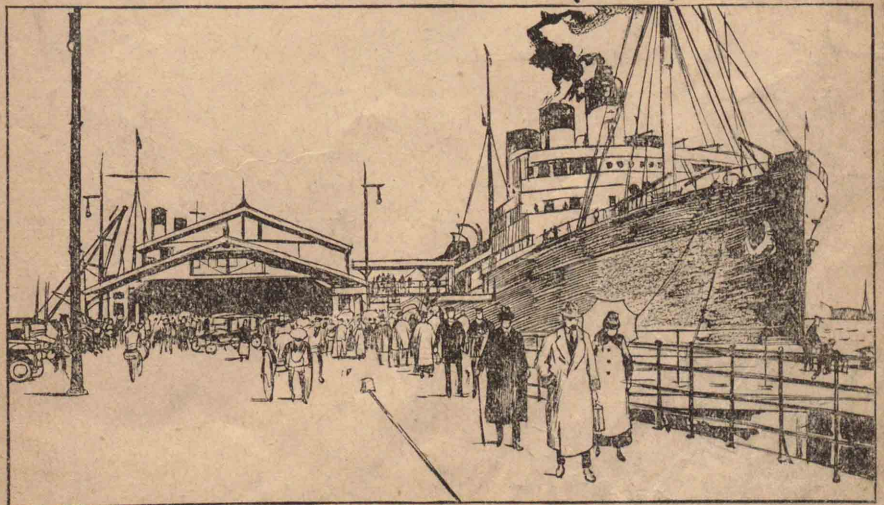
港には防波堤ありて、風波のおそれ少く、水深くして、いかなる大船もきしに横づけにすることを得。

得 輸 主

輸出品の主なる物は、生絲と羽二重はぶたへにして、

等 來 便

多くアメリカ合衆國・イギリス・フランス等に送る。又輸入品は綿わたもつとも多く、鐵類これに次ぐ。しかして、綿は印度・アメリカ合衆國より、鐵類はアメリカ合衆國より來る物多し。横濱と東京との間には汽車・電車の便あり。汽車はお



國七

分 岸

よそ三十分毎に、電車はおよそ十分毎に發着す。

第四 潮干狩

舟が岸をはなれた。もやが水の上をこめてゐる。大川を下つて行く舟の中はうすら寒い。不意に白い鳥がもやの中からとび立つた。おとうさんにうかぶつたら、かもめだとおつしやつた。

潮干狩

川口近くになると、潮干狩の舟がいくそうも

明 唱 洲 織

よつて來た。潮がずん／＼さがるので、舟はすつすと進んで、たちまち海へ出た。ぱつと明るくなつた。にいさんが「我は海の子をうたひ出して、丸山君が合唱した。だん／＼潮が引いて、もう其所此所に洲が見え出した。船頭が

「皆さん、そろ／＼おしたくだ。」

と言つたので、みんな羽織をぬいで、着物のすそをはしよつた。舟は間もなくとまつた。船頭

妹

がさををつき立てて、それに舟をつないだ。さうしてさをの先に、赤いしるしのあるはんてんをしぱりつけて、

「皆さん、これが目じるしだよ。」

と言つた。僕が一番先に海へ下りた。水は思つたよりつめたかつた。

おとうさんも、にいさんも、丸山君も、妹も、お松も、みんな下りた。

小さい熊手くまでで砂をかくと、おもしろいやうに



蛤

あさりが出た。時々は手ごたへがして大きな蛤が出た。浅い水たまりを歩くと足のうらがぬるりとした。おさへて見たら、小さなかれひであつた。

「丸山君、かれひだ。」

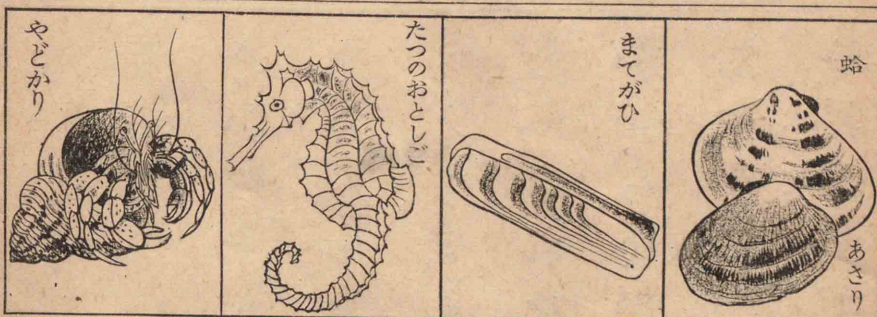
と言つて、つかんで見せると、ふりかへつたのは知ら



ない人であつた。

潮がすつかり落ちて、海はをかのやうになつた。舟で来た人も、をかから来た人も入りまじつて、何百人か数へきれない程ゐる。何時か知らない人とも話し合ふやうになつて、大きな蛤や馬刀貝まてがひでも取ると、おた





がひに見せ合ふ。日は暖で、風はなし、むされるやうな気がする。女の人にはたすきをかけて、手ぬぐひをねえさんかぶりにしてゐる。妹やお松は何があつたのか、笑ひながらしきりに取つてゐる。其のうち潮がさしはじめたので、みんな舟にもどつた。めいゝゝさるをかしげて、え物を見せ合つ

珍

た。妹とお松のさるには、やどかりがたくさんゐた。珍しかつたのは、丸山君のさるに、たつのおとしごが一つあつたことであつた。舟の中でゆつくりべんたうをたべた。潮がだんだんさして来て、何時の間にか洲が見えなくなつた。船頭がさをぬいた。舟は上げ潮に乗つて、をかの方へ動きはじめた。川口にかゝつた時ふりかへつて見たら、もう広い海には誰もゐなかつた。

昨日おかあさんにするすをしていた  
だいて、うち中の者が潮干狩に参り  
ました。此の蛤は私どもの拾つた中  
から、大きなのをよつたのでござい  
ます。

四月二十三日

正男

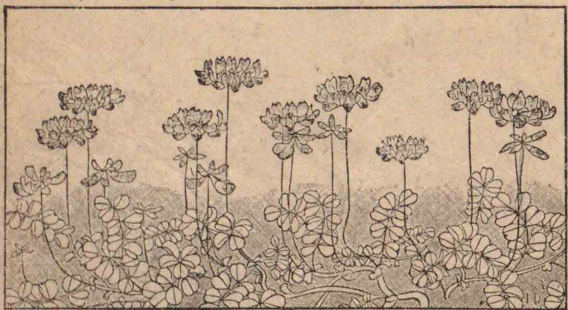
叔父上様

第五 れんげさう

此の頃はれんげさうの花ざかりである。四角かく

な田には四角に、細長い田には細長く、田の形  
其のまゝに紅紫あかむらさきのもうせんをしきつめたや  
うに見える。麥畠やなたね畠の間にさいてゐ  
るのは、ことに目立つて美しい。

道ばたや土手にさいてゐるのは  
こぼれ種であらうしやうの強い  
もので、一度種が地に落ちれば、年  
年其所で花がさく。石垣の間でも、  
地藏様だうのかげでも、辻堂だうのえんの



下でもさく。

色が美しい上に、姿がやさしいので、つみ草の時には、誰も之を取つて花たばにする。

第六 鎌倉攻

極樂寺坂の味方があやふうございます。」

といふ使の後から、

「大將も討死されました。」

といふ使が來たが、總大將の新田義貞はびくともしません。手もとの軍ぜい二萬騎を引き

死 總

此方

數

浮

鎌倉

つれて、たゞちに極樂寺坂へ向ひました。

稻村崎いなむらかきの此方に着いて、賊のそなへを見渡し

ますと、北の山手には木戸を立てて、數萬の兵

が之を守つてゐます。又南の海上にはひしひ

しと軍船を浮べて、岸には大木がきりたふし

てあります。鎌倉へは海陸ともに攻めこむす

きがありません。

義貞は馬から下りてかぶとをぬぎ、はるぐ

と海上を拜しました。さて、心の中に、義貞今天

起 臣 開 満

皇の御ためにいくさを起して、  
 賊臣北條をほろぼさうとして  
 るます。海神ねがはくは潮を退  
 けて、道を開かせたまへと念じ  
 て、黄金作の太刀を取つて、海  
 中に投入されました。  
 すると、これまで潮の満ちてゐ  
 た稲村崎は、其の夜の月の入る  
 頃に、二十餘町にはかに干上つ



真

て砂地にかはり、落ちて行く潮  
 にさそはれて、賊の軍船はこと  
 ごとく沖へ流れてしまひまし  
 た。

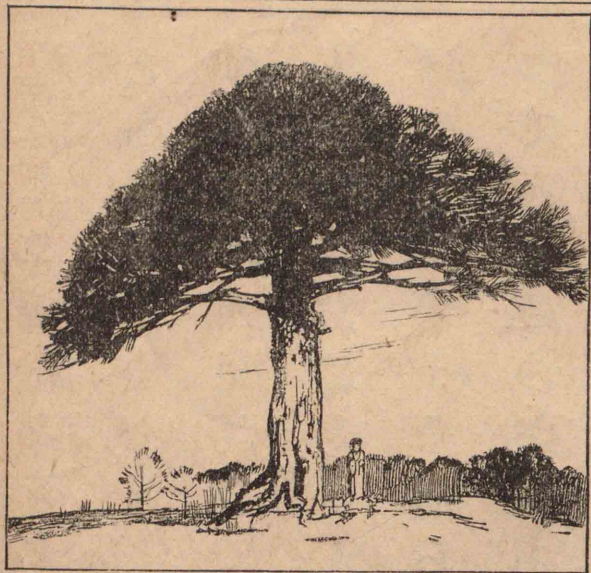
義貞は之を見て、  
 「ものども進め」と、  
 其の遠干がたを  
 真一文字に鎌倉  
 さして攻めこみ



ました。賊のそなへは忽ちくづれて、防ぐにも防がれず、たゞあわてさわいでゐます。此の時義貞が方々へ火をかけさせますと、濱風が之をあふり立てたからたまりません。鎌倉は一面火の海になつて、賊の大將高時以下北條方は、此の火の中にほろびてしまひました。

第七 傘松

村の西にくぬぎ林がある。それを通りぬけて

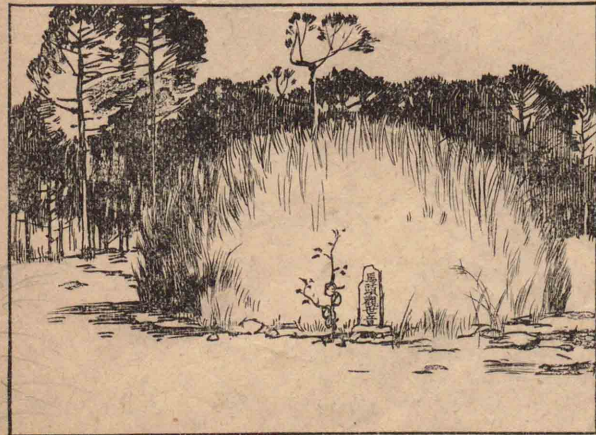


四五町上ると、道ばたに大きな松が一本ある。みきが二かゝへもあつて、枝が傘をひろげたやうに出てるので、村の人は之を傘松と呼んでゐる。其の松の下に石できぎんだ地藏様が立っていらつしやる。晒さらし木綿もめんのづきんをかぶつて、雨ざらしになつていらつしやるが、何時もお

花が上つてゐる。時々は線香せんかうの上つてゐるこ  
ともある。

茶 菓

傘松の四五間さきに、小さな茶屋が一軒ある。  
茶屋にはおばあさんが一人  
ぼつちで菓子やわらぢを賣  
つてゐる。此のおばあさんに  
むすこが一人あるのださう  
だが、ずつと前から南アメリ  
カへ行つてゐるといふこと



笠

だ。

茶屋から二三町行つた所の右手に、まんぢゆ  
う笠をふせたやうな塚つかがある。塚の前に馬頭ばとう  
觀世音くわんぜおんとほつた石が立つてゐて、其の前に時  
時新しい馬のくつが上つてゐる。これは馬が  
けがをしないやうに、馬方が上げるのださう  
だ。

第八 馬

馬はたいそう元氣のよい動物で、生れた日か

走乗 荷耕 争送 愛養

らすぐ歩く。  
走ることがはやくて、乗用としてはこれにまさる動物がない。又力が強いので、荷物をつけたり、荷車をひかせたり、田や畠の耕作に使つたりする。

戦争の時には乗用としても、輸送用としても、きはめて大切なものである。武人は昔から之を愛養して、いざといふ時には、それに乗つて出かけた。畠山重忠しげたかはひよどりごえのさか落

乃 寸 諸 近

しに、馬をしよつて下りたといふし、近くは乃木大將も、馬は煉瓦造れんぐわの小屋に入れて置かれたのである。

何種か

馬の高さは前足の所ではかる。八寸・九寸などといふのは、四尺八寸・四尺九寸などのこと、五尺あると、十寸とといふ。それ以上は十寸一寸・十寸二寸などといふ。

我が國の馬は西洋諸國の馬にくらべると、せいも低く、體格たかもおとつてゐたが、近年外國か



改良

ら種馬を輸入したので、大いに改良されて、  
たる所に良馬を見るやうになつた。

第九 大阪

大阪ハ昔仁徳天皇ノ都シタマヒシ所ニシテ、  
其ノ頃天皇ハ立上ル煙ノ少キヲ見テ、民ノ貧  
シキヲアハレミタマヒキ。今ハ商工業サカン  
ニシテ、大工場多ク、エントツノ煙ツネニ空ヲ  
オホヘリ。

市

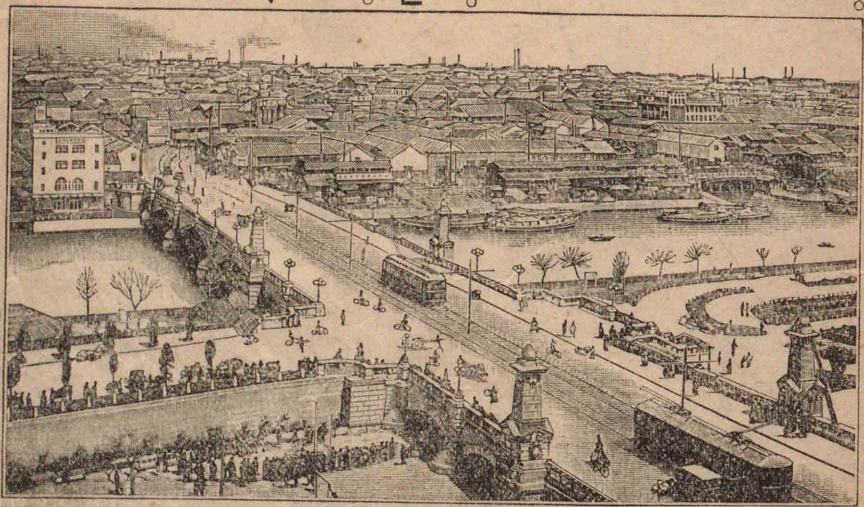
場業貧煙阪

市中ヲ流ル、川ヲ淀川トイフ。淀川ハイクス

往復

神戸

チニモ分レテ海ニソ、グ。  
又多クノ堀アリテ、川ト川  
トヲツナゲリ。  
市中ニハ電車ノ往復シゲ  
ク、港ニハ船ノ出入タエズ。  
大阪ノ西十里ニ神戸アリ。  
神戸ハ一大貿易港ニシテ、  
輸出入ノサカンナルコト  
横濱ニユヅラズ。



利交

大阪神戸間ノ交通ノ便利ナルコト、東京横濱  
間ノ如シ。

第十獅子と武士

眠 怒 獸

昔一匹の獅子、森の中にて眠りしに、後の暗き  
やぶかげより大いなる蛇つと出でて、獅子の  
からだにまきつきたり。獅子はおどろきてふ  
りはなさんとしたれど、蛇はますますかたく  
しめつけたり。獅子の目は火の如くにもえ、怒  
りてさけぶ聲には、百獸おそれてにげまどへ

打 満

ど、蛇はますます強くしめつけたり。今や獅子  
の息はたえんとす。  
此の時此所に来りしは一人の武士なり。武士  
の馬はおどろきて、後足にて立上り、おそれて  
其所に近づかんともせず。武士は太刀をぬき  
て馬よりとび下り、満身の力をこめて、蛇の胴  
中目がけて打下せば、蛇は真二つとなりて、大  
地にのたうちまはりてたふれたり。  
獅子はうれしげに一聲高くほえ、たてがみを

無  
從者  
幾

ふるひ、四足をのばして後、しづかに近よりて武士の手をなめたり。これより獅子は日夜武士につきしたがひてはなれず、武士には無二の從者となれり。かくて幾年かすぎし後、武士は海をこえてふるさとへ歸ることとなれり。獅子



行  
得

底

はもとより武士にしたがひて行かんとせり。しかるに船長はおそれて之をゆるさず。こゝに武士と獅子とはわかれざるを得ざることとなりぬ。

船は沖に向ひて港を出でたり。獅子はかなしげにほえて、濱べに立上りたりしが、つと海の中にをどり入りたり。船におよぎつかんとてなり。されどかなふべくもあらず。獅子は武士の方を見まもりて、あはれ、波の底に入りぬ。

第十一 初夏の夜

なはてづたひに来る風も、  
若葉のにほひかんばしく、  
空一ぱいの星は皆、  
涼しく金にまたゝけり。

若 涼 面 蛙 窓

田の面は水の廣々と、  
蛙の聲もにぎはしく、  
谷あひの家窓明けて、

親 連 露 面 平

夜に親しむ時は來ぬ。

第十二 大連だより

大連へ來てから、もうかれこれ七八  
十日、町のもやうも大分わかつて來  
ました。

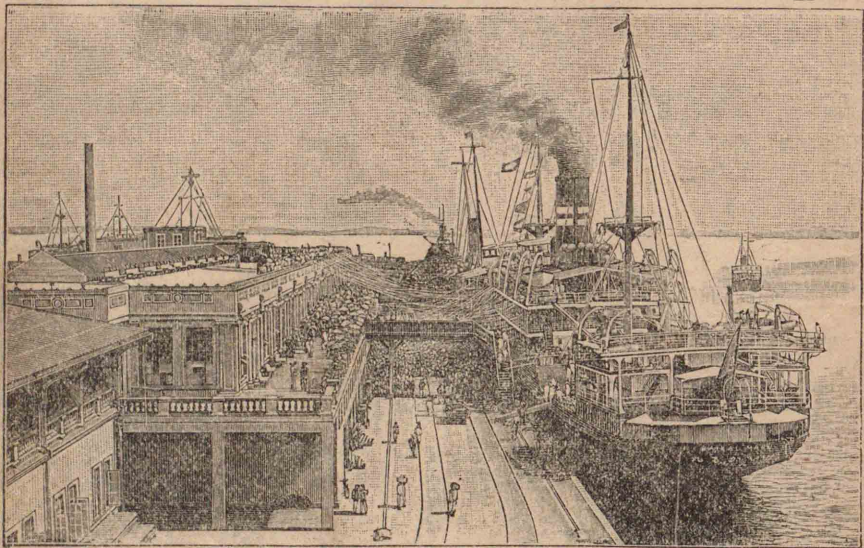
町に大山通乃木町、おく奥町、こがま兒玉町など  
と、日露戦争の時の大將方の名を取  
つてつけてあるのは面白いでせう。  
通は廣くて平で、歩道と車道の間

並 建 造 似 會 那

並木が植ゑてありますが、此の頃は  
 其の葉の美しいさかりです。  
 目ぬきの所には三階建・四階建の石  
 造や煉瓦造れんぐわの家が軒をならべて立  
 つてゐるので、日本の町よりはかへ  
 つて西洋の都會に似てゐるといひ  
 ます。人口はおよそ十八萬五千、其の  
 中日本人は七萬人餘り、支那人は十  
 一萬人餘りですが、どちらも年々ふ

畫

えるさうです。  
 船で來れば、神  
 戸もじから三晝夜、  
 門司からは二  
 晝夜で當地へ  
 着きますが、來  
 て先づ誰でも  
 おどろくのは、  
 波止場はとばの大き



北京

なことです。第一第二第三と三つならんでゐて、たくさんな大船をひときに横づけにすることが出来ます。船から陸あげした荷物は、すぐ其所から汽車にのせて、ハルビンへでも北京へでも送ることが出来ます。大連の貿易高は横濱や神戸よりは少し下で、大てい大阪ぐらゐだといひます。輸出品は豆粕かすが第一で、輸入

綿布

箇

候

快晴

旅順

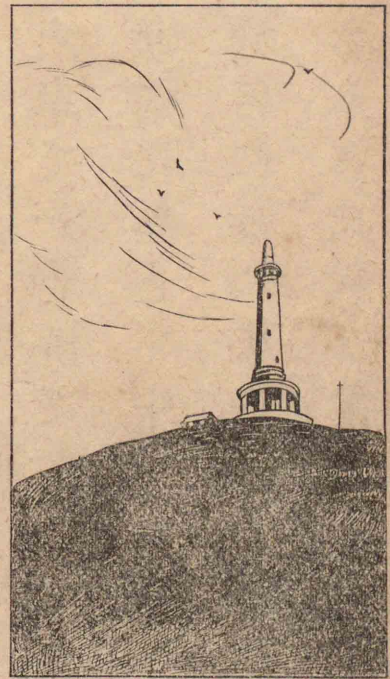
修 忠塔 勇

品は綿布が一番多いといふことです。

まだ来て二三箇月で、よくはわかりませんが、氣候も思つたよりよくて、快晴の日が多いやうです。

旅順へは汽車で一時間で行けます。十日ばかり前に、私ども中學の二年生が修學旅行に行つて、白玉山はくぎやま上の表忠塔をあふぎ、又我が忠勇の士が

血を流して取った二百三高地にも上つて歸りました。



後便に又いろく申し上げませう。

六月十五日

良助

愛作君

第十三 一太郎やあい

後助

日露戦争當時のことである。軍人をのせた御用船が今しも港を出ようとした其の時、

「ごめんなさい。」

といひく、見送人をおし分けて、前へ出るおばあさんがある。年は六十四五でもあらうか、腰に小さなふろしきづつみをむすびつけてゐる。御用船を見つけると、

「一太郎やあい。其の船に乗つてゐるなら、鐵砲を上げろ。」

とさけんだ。すると甲板かんばんの上で鐵砲を上げた者がある。おばあさんは又さけんだ。

「うちのことはしんぱいするな。天子様によく御ほうこうするだよ。わかつたらもう一度鐵砲を上げろ。」

すると、又鐵砲を上げたのがかすかに見えた。おばあさんは「やれく」といつて、其所へすわつた。聞けば今朝から五里の山道を、わらぢがけて急いで來たのださうだ。郡長をはじめ、見

送の人々はみんな泣いたといふことである。

第十四 川中島の戦

一 一騎打

越後えちごの上杉謙信けんしんと甲斐かひの武田信玄しんげんが、たびたび信濃しなのの川中島で戦つた。

ある時謙信が山の手陣を取つてゐると、信

玄は兵を二手に分けて、はさみうちにしようとした。謙信はそれをさとつて、夜の間に進んで信玄の陣へ攻入つた。信玄は不意を打たれ

陣



受

ておどろいたが、忽ち陣立をかへて、敵を引受けた。

兩軍は入りまじつて、火花をちらして戦つた。謙信は馬に



一むちくれて、信玄の本陣に切りこみ、大太刀をふりかざして、信玄に打つてかゝつた。信玄は刀をぬくひまがない。ぐんばいうちはでふ

肩

せいだが、えが折れて、肩先へ切りつけられた。信玄の家來は之を見て、後からやりで謙信をついたが、あたらな。カ一ぱいに謙信の馬をなぐりつけた。馬はおどろいてとび上つたので、信玄はあぶない所を助かつた。

二 中なほり

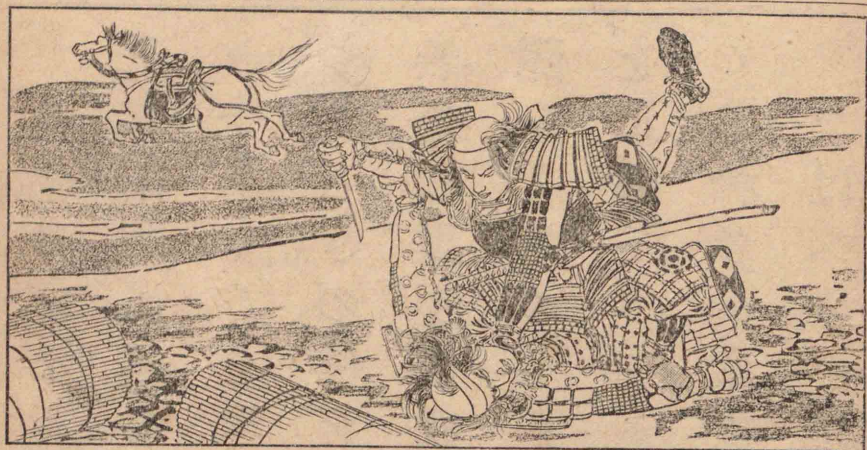
川中島で前後五回戦つたが、まだ勝負がつかなかつた。第六回目にいたつて、信玄から謙信へ、

回  
勝負

明組 同具

「戦をはじめてから十二年、今に勝負がきま  
らない。よつて明日たがひに勇士を一人づ  
つ出して組討をさせ、勝つた方のものが川  
中島を取ることにしては。」  
と申しこんだ。謙信はこれに同意した。  
翌日武田方からは安間彦六といふ大の男が、  
物の具見事に着かざり、大の馬に打乗つて、上  
杉方の陣へ向つた。上杉方からは小さな馬に  
乗つた小さな鎧武者よろひむしやが一人あらはれて、

兵相



「これは長谷川はせがわ與五左衛門よござゑもん  
と申す者、小兵なれどもお  
相手致す。」  
と名のつた。  
二人はたがひに馬を乗りよ  
せて、馬上のまゝでむんずと  
組み、兩馬の間にどうと落ち  
た。  
彦六が與五左衛門を組みふ

止 鬼 約束

せた。武田方が之を見て、聲をあげて喜ぶと、與五左衛門は忽ちはねかへして、彦六を組みしき、手早く首を取つてさし上げた。上杉方はどつとときの聲をあげた。

無念に思つて、武田方から十騎ばかり、木戸を開いて切つて出ようとした。此の時信玄は之を止めて、

「鬼神の如き彦六が、あれ程の小兵に討たれたは味方の不運。約束の川中島は謙信に渡

直

弟子

す。

といつたので、めでたく中なほりが出来た。

第十五 カチ屋

私ノ近所二年ヨリノカチ屋ガアリマシタ。セイガ高く、目ガスルドクテ、チヨツト見ルト、コハイヤウデシタガ、イタツテ正直デ、氣立ノヤサシイ老人デシタ。

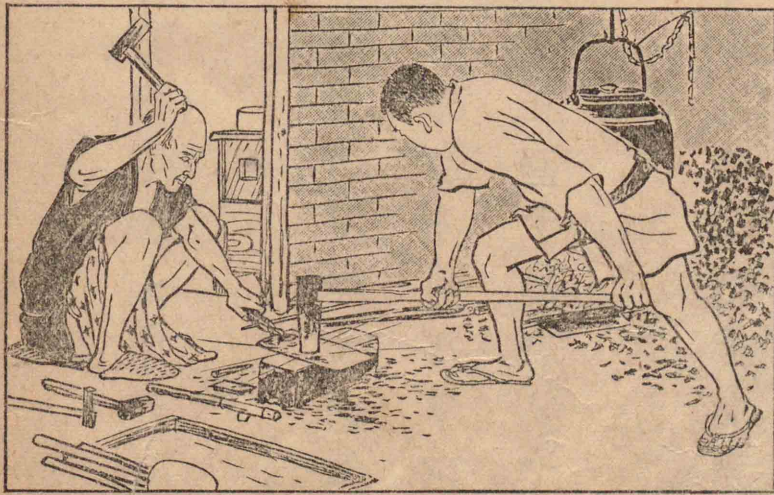
トンテンカン、トンテンカント、毎朝暗イウチカラ、弟子ヲ相手ニ打ツツチノ音ガ聞エマシ

休

鋏

輪

タ。一日モ休ンダコトハアリマセン。私ハ時々  
 其ノ仕事場へ行ツテ見マ  
 シタ。鎌ヲキタヘテキタコ  
 トモアリマス。鋏ヲ打ツテ  
 斗タコトモアリマス。ナタ  
 ヲ打ツテキタコトモアリ  
 マスシ、車ノ輪ヲ打ツテキ  
 タコトモアリマス。何時カ  
 私ノウチノツルベノ金タ



暑 働

奉公

ガガコハレタ時、ツクロヒヲタノンダラ、翌日  
 スグニナホシテクレマシタ。  
 夏ノドンナ暑イ日デモ、アセラ流シナガラ、日  
 ノクレルマデ働イテキマシタ。イカニモ丈夫  
 サウナ老人デシタガ、去年ノクレニ死ンデシ  
 マヒマシタ。其ノ時分マデ、ヨソへ奉公ニ行ツ  
 テキタ若イムスコガ、今デハ其ノ後ヲツイデ、  
 朝カラ晩マデ、相カハラズ、トンテンカン、トン  
 テンカント、働イテキマス。



航終郷

通

講堂

第十六 航海の話

遠洋航海を終へて、郷里に歸り來れる太平丸の船長は、一日其の町の學校へまねかれて、航海の話となせり。

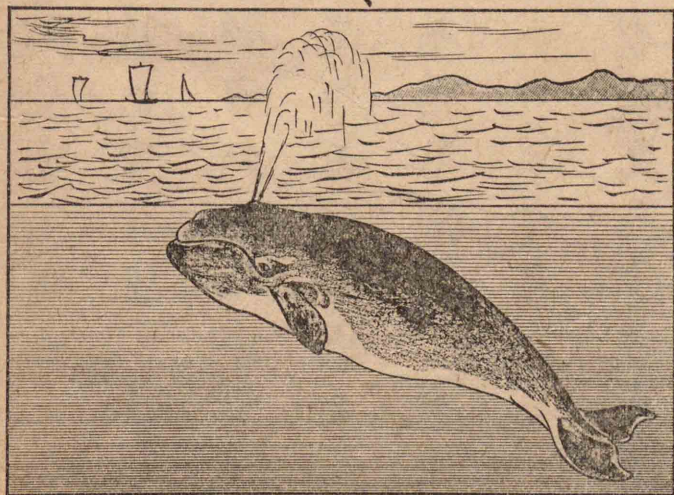
「私も子どもの時には、毎日此の學校へ通つて、皆さんと同じやうに、あの運動場で遊んだり、此の講堂でお話を聞いたり致しました。で、今日此のなつかしい學校に來て、皆さんにお話をするのは、何よりもうれしいの

存 員 並 岸

でございます。私は年中航海をしてゐるものですから、少し其のお話を致します。皆さんは海を御存じでせう。汽船も軍艦も御存じでせう。私の乗つてゐる太平丸といふのは、長さが七十間程もある汽船で、乗組人員だけでも百人からあります。先づいかりをあげて港を出て行きますと、港に立並んでゐる人家は、だん／＼小さくなつて行きます。海岸の松原や、いその小山

光

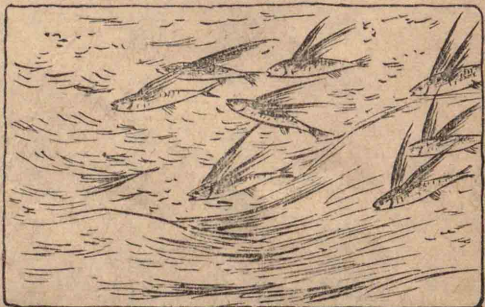
も次第に遠くなつて、しまひにはもう何も見えなくなります。どちらを向いても青い水ばかりです。けれども日の出や日の入には、日光が波にうつつて、水の色が金色になりますし、月夜には波が銀色に光つて、其の美しいことは何ともいひやうがあり



鯨

甲板

ません。時には鯨が高く潮を吹いてゐるのを見ることがあります。何萬とも知れないいるかが、はね上つてはおよぎ、はね上つてはおよぎして行くのを見ることもあります。又ある時にはとび魚が甲板の上へとび上ることもあります。外國の港に着くと、見なれない形の家が並んで立つてゐます。其所にゐる人は、私ども



總

とはまるでちがった風をして、まるでちが  
 つた言葉で話をしてゐます。見るもの聞く  
 ものが、總べて皆珍しいのであります。  
 船長はコツプの水を一口飲み、又其の話を  
 つゞけたり。

恐

航海といふものは、かういふ面白いもので  
 すが、たまには恐しい目にもあひます。急に  
 暴風雨が来ると、山のやうな波が立つて、船  
 は今にも沈むかと思ふやうになります。け

瀬

れども船はなかく沈むものではありま  
 せん。又きりがかゝつたり、大雪が降つたり  
 して、一寸先も見えなくなることもありま  
 す。こんな時には、シヤウとツ悪くすると浅瀬へ乗上げ  
 たり、外の船に衝突したりするやうなまぢ  
 がひが出来ます。それゆゑたえず海の深さ  
 をはかつたり、かねや汽笛を鳴らしたりし  
 ます。深さはかるのは、浅瀬に乗上げない  
 ため、かねや汽笛を鳴らすのは、外の船に自

笛

等

分等の船の居ることを知らせて、衝突をさけるためであります。

一たい船にはらしんぎといふ物があつて、それで方角をとつて進みますから、いくらきりが深くても、まるでちがつた方へ行くやうなことはありません。又夜はいくら暗くても、星が出てゐれば、それにたよつて方角を知ることゝ出来るし、自分の船の居場所を知ることも出来ます。又海岸には所々

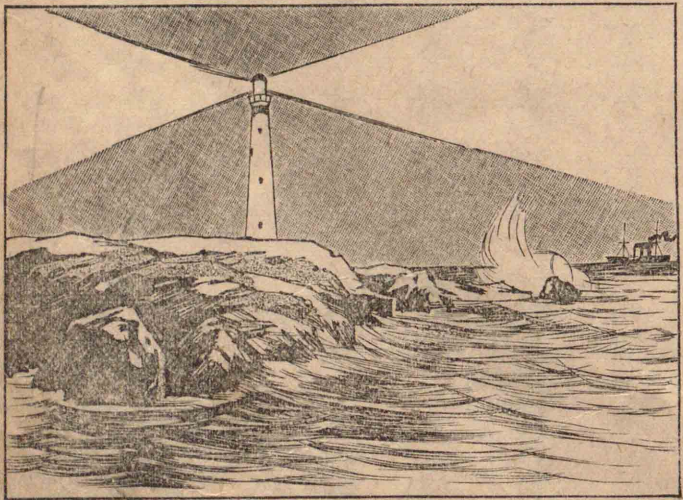
角

燈臺

何所

に燈臺がありますから、それを見ると、あれは何所だといふことが分ります。此の星を見分けることや、燈臺のあかりを知ることは、船に乗る者にとつて、はなはだ大切なことなのであります。

船長はかくいひて後、一だん聲をはり上げて、





残

「さておしまひに一ついつて置きたい事があります。それは日本は海國でありながら、まだ海を恐れる人もあるといふことで、これは實に残念な事であります。ちよつと渡船に乗つてさへ、こはがる者があります。海の波を見たばかりで、もう恐しがる人もあります。こんなことでは、どうして海國の民といはれませう。

皆さんのうちには、大きくなつてから、商用

他 漁

寫眞帖

去

其の他で、外國へ出かける人もありませう。漁業や航海業に従事する人もありませう。どうか今から十分海になれて置くやうにしてもらひたいのであります。」

とむすびたる時は、拍手の音しばらくはやまざりき。かくて船長は外國より持歸りたる寫眞帖を學校に寄附して去れり。

第十七 安倍川の義夫

百八九十年昔の事であります。連日の雨で、川

といふ川には水があふれました。橋のないところでは五日も十日も水のひくのを待たなければならず、川べの宿はとめきれない程の客でございました。

中でも安倍川の宿は一そりの人ごみであつたと申しますが、「それ、川が渡れる」といふことになりますと、我もくくと先をあらそつて渡りました。渡るといつても、自分一人では渡ることは出来ません。水になれた人夫の肩に乗

るか、手をひいてもらふかして渡るのでございます。大ぜいの人々が口々に人夫を呼んでは我先に渡らうとしますし、年よりや子どもは聲を立てて呼合ひますので、川べはひじやうなさわぎでございました。此の時見すばらしいなり



をした一人の男が、人夫と渡賃を高いやすいと言つてあらそつてゐましたが、相談は出来ないものと見きつたのでせう、着物をぬいで頭にのせ、一人で川へはいつて行きました。さうしてずゑふんあぶない目にあつて、やうやう向岸に着きました。

かの人夫は、少ししてから、何の氣もなく、先程渡賃をあらそつた所へ行つて見ますと、革かはの財布さいふが落ちてゐました。取上げると大そうお

もくて、中には小判こばんがどつさりはいつてゐました。これはあの人<sup>こ</sup>が落して行つたにちがひないが、渡賃が高いといつて、此のあぶない川を一人でこしたほどの人である。もし此の大金がなかつたら、氣がちがつて死ぬやうな事になるかも知れぬ。氣の毒なことだと思つて、人夫はすぐ川を渡つて、かの人夫を追っかけました。

二里程行つて、大きな峠へかゝりますと、上か

ら片はだぬいで、右手につゑをついて、かけ下りて来る者があります。見れば先の男でございます。人夫は「もしく」と呼びかけて、たづねました。

「あなたは今朝一人で川をこした方ではありませんか。」

「さうです。」

「なんで又さうあわてて引つかへします。落し物をしましたから。」

といひく、かけ出します。人夫は其の男のたもとをおさへて、

「まあ、お待ちなさい。落した物は。」

「革の財布で。」

「中には。」

「小判が百五十兩はいつて居ります。五十兩は黄色なきれにつゝんであつて、百兩は小さなふくろに入れてあります。外にまだ手紙が七八本。」

「安心しなさい。此所へ持つて来ました。」  
といつて、人夫は財布を出して渡しました。か  
の男はゆめかとはばかり喜んで、財布を幾度か  
いたゞきました。が、目からはなみだがひつき  
りなしにこぼれてゐます。しばらくして、  
「家の中で見えなくした物でも、中々出ない  
ものでございます。まして人通の多い渡場  
で落しましたから、たとひとんで行つて見  
た所で、もうあるまいとは思ひましたが、此

のまゝ歸ることも出来ませんので、引つか  
へして参りました。いよくない時には、川  
の中へとびこんで死んでしまはうと、かく  
ごをして來たのでございます。それがあな  
たのやうな正直なお方に拾はれて、財布を  
いたゞかせてもらひましたが、いたゞいた  
のは財布ではなくて、私の命でございます。  
ついては此の中の金を半分だけお禮のし  
るしにさし上げます。」

といつて、財布の中に手を入れました。人夫は之を見て、

「おやめなさい。あなたから一文でももらふ氣があるくらゐなら、此所まで持つて來はしません。さあ、道を急ぎなさい。私は渡場へ歸つて人を渡します。」

といつて、歸らうとしました。かの男は「どうぞしばらく。」といつて引きとめました。

「私は此所から百里さきの紀州きしゅうの者でござ

います。房州ぼうしゅうへ出かせぎに行つて、れふを致して居りましたが、仲間の者が國へ送る金をあづかつて、此の財布に入れて來たのでございます。小ぶくろの方は私どものだんなが國へおやりになる金ですが、だんなはなさけ深い方ですから、此の金をあなたにさし上げましても、おしかりになることとはあるまいと思ひます。どうぞ之を受取つて、私の氣がすむやうにして下さい。其の上あ

あなたのお名前をうけたまはりたうござい  
ます。妻や子どもに、朝晩おねんぶつのかは  
りにとなへさせます。」

人夫は之を聞いて、首をふりました。

「もしお金をもらつたら、あなたの氣はそれ  
ですむかも知れませんが、私の氣がすみま  
せん。私は川ばたの人夫で、名前をいふ程の  
者ではありません。家には七十近い父と、三  
十になる妻と、三つになる子どもがあるの

で、どうかすると、其の日のくらしにこまる  
やうなこともありますが、心にすまないこ  
とはまだ一度もした事はありません。たと  
ひ親子の者がうゑ死をするやうなことが  
あつても、人からいはれなく金をもらはう  
とは思ひません。」

かういつて、さつさと歸つて參ります。かの男  
は「それではこまる、せひ」といひながら、人夫の  
後について來ましたが、とうく又川を渡つ

て、人夫の家へ参りました。見れば年取つた父といふのが、うす暗い小窓の下で、わらぢを作つて居りました。妻はろばたでぼろをつぶつて居ります。かの男がわけを話して、どうかお禮を受けてくれといひますと、年よりはちよつとふりかへりました。が、何ともいはず、すぐ又仕事をつぶけました。妻もまた「せつかくですが」といつて、相手になりません。男はしあんにくれて、役所へうつたへて出ま

した。役人はわけをくはしくたづね、人夫をも呼出して、

「さてく、二人ともまことに心がけのよい者。近頃かんしん致した。紀州の男は急いで國へ歸つて、其の金をまちがひなくとゞけるやうに致せ。人夫には此方から手あてを致す。」

と申し渡して、人夫にほうびの金をたくさんやつたと申します。



信藤

第十八 木下藤吉郎

豊臣秀吉がまだ木下藤吉郎といつて、織田信長おだの草履取ぎゅうりをしてゐた時のことである。信長はよく夜明前から馬場へ出て馬を乗りならした。毎朝げんくわんへ出て、

「誰か居るか。」

と呼ぶと、いつも藤吉郎が真先に出て来た。或大雪の朝、信長はいつもより早く起きて、

「誰か居るか。」

驚

と呼ぶと、やはり藤吉郎が出て来た。

「そち一人か。」

「はい。」

「いつもより早いのに、よく参つて居つた。」

「いつも人より一時前に参つて居ります。」

「一時も前に。」

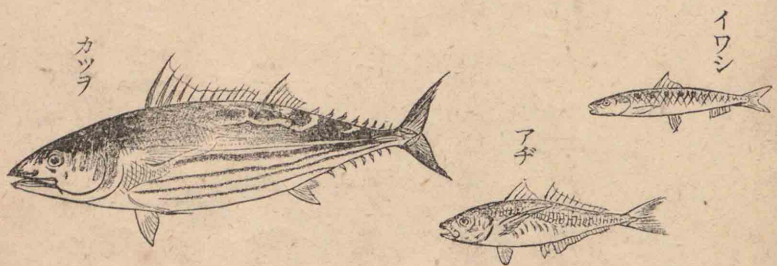
といつて信長は驚いた。一時は今の二時間にあたるのである。

「寒からうが。」

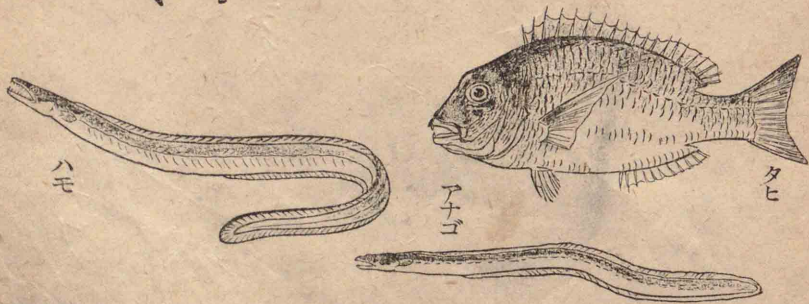
「少しも寒くはございません。」  
 「寒くはない。」  
 「はい。これが御奉公だと思ひますれば、少しも寒くはございません。」  
 信長はかるくうなづいたが、其の後間もなく藤吉郎を草履取から引上げて役人の數に入れた。これがそもく藤吉郎出世のいとぐちである。

第十九 海ノ生物

魚 植

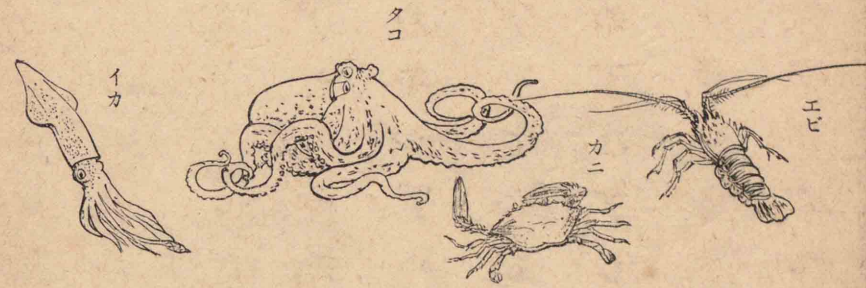


一 動物  
 海ノ中ニハ魚ヤ貝ヤ其ノ外イロくノ動物ガスンデ居リ、又サマザマノ植物モ生エテ居ル。  
 魚類ニハイワシアヂ、カツラナドノヤウニ、水ノ表面ニ近イ所ヲ



泳藻

様子



泳グモノガアリ、タヒアナゴハモ  
 ナドノヤウニ、岩ノカゲヤ海藻ノ  
 間ヲ泳グモノガアリ、カレヒヒラ  
 メナドノヤウニ、底ニ沈ンデキル  
 モノモアル。  
 魚類ノ外ニ、エビ・カニ・タコ・イカナ  
 ドガスンデキル。エビノピンク  
 ハネタリ、カニノ横ニハツテアル  
 ク様子ハ、池ヤ川ニスムモノトチ

泥

決

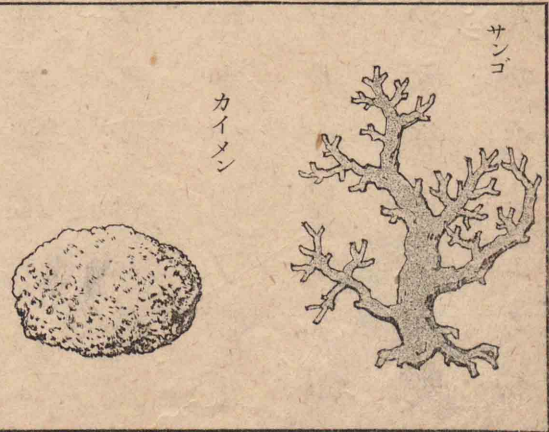
ガハナイガ、タコヤイカガ、アシヲ  
 ソロヘテ泳グ様ハ、マコトニ面白  
 イ。  
 アサリヤ蛤ハ砂ヤ泥ノ中ニ居リ、  
 カキヤアハビハ岩ニツイテキル。  
 アハビハ岩ヲハナレテ動クコト  
 ガアルケレドモ、カキハ一度ツイ  
 タラ決シテハナレナイ。カキハ又  
 スグフエルモノデ、軍艦ヤ汽船ハ



珠

集虫

時々之ヲカキオトサナケレ  
 バナラナイホドデアル。又眞  
 珠<sup>シメキ</sup>貝<sup>シメキ</sup>トイフモノガアル。指輪<sup>ユビワ</sup>  
 ヤ襟留<sup>エリドメ</sup>ナドニハメル美シイ  
 眞珠ハ、此ノ貝ノカラノ中ニ  
 アルノデアアル。  
 虫類<sup>ケムシ</sup>モタクサン居ル。中デ面白イノハサンゴ  
 デ、タクサン集<sup>アツ</sup>ツテ、木ノ枝ノヤウナ形ヲシテ  
 生<sup>ナ</sup>ル。カンザシノ玉ヤ根ガケノ玉ニスルサン

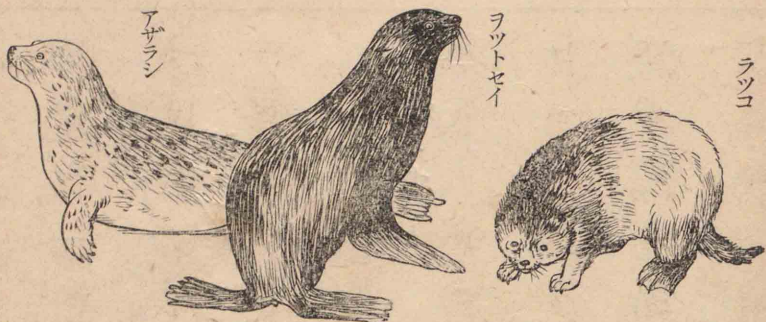


八十二

骨(虫)

獸

甚



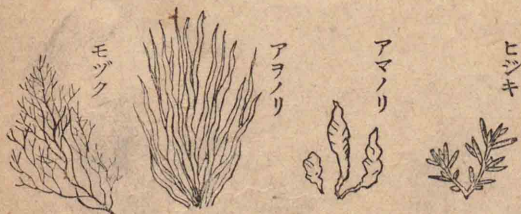
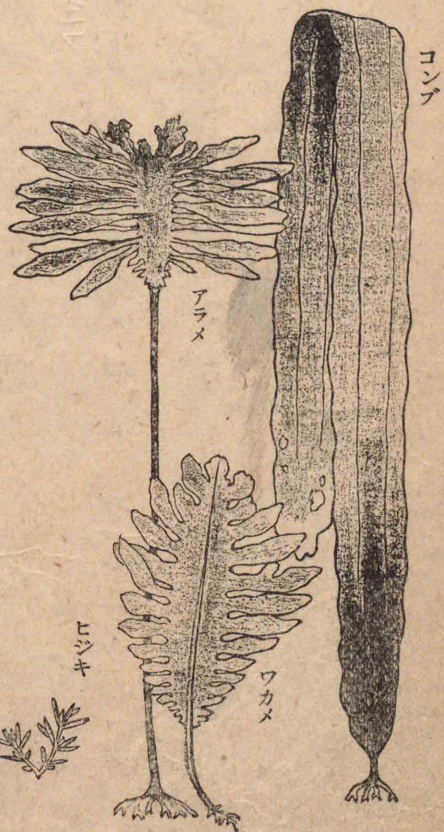
ゴハ、皆此ノ蟲ノ骨<sup>ハネ</sup>デアアル。又物ヲ  
 洗ツタリフイタリスル時ニ使フ  
 海綿モ、ヤハリ海ノ底ノ岩ニ取り  
 ツイテ生<sup>ナ</sup>ル蟲ノ骨デアアル。  
 海ニハ又獸類<sup>ケムシ</sup>ガスンデ生<sup>ナ</sup>ル。陸ノ  
 獸<sup>ケムシ</sup>ニ似タモノニハ、ラッコヲツト  
 セイ。アザラシナドガアリ、魚ニ似  
 タモノニハ、イルカヤ鯨ガアル。鯨  
 ハカラダガ甚<sup>シ</sup>ダ大キイ。陸ニスム

大人

モノデハ、象  
 ガ先ヅ一番  
 大キイガ、象  
 ラ鯨ニクラ  
 ベルト、赤子  
 ト大人トヨリモ、モツトチガフ。

二 植物

海ノ深イ所ハ何萬尺モアル。コンナ  
 所ニハ、動物モゴクマレデ、植物ハ全



クナイガ、岸ニ近イ淺イ所カラ二三  
 百尺グラキノ所マデニハ、海藻ガ生  
 エテキル。

海藻ニハイロクアル。先ヅタベル  
 モノニハ、コンブワカメアラメヒジ  
 キアマノリアヲノリモヅクナドガ  
 アリ、糊ニスルモノニハ、フノリヤツ  
 ノマタガアリ、トコロテンヤカンテ  
 ンニスルモノニハ、テングサヤエゴ



肥料

細體(体)

緑

ノリガアル。此ノ他海藻ニハマダタクサンナ種類ガアツテ、中ニハ肥料ニスルモノモアル。海藻ノ形ハ様々デ、帯ノ様ニ廣クテ長イノモアレバ、全體ガ細カニ分レテ、枝ノ様ニナツテ、キルノモアリ、ニハトリノトサカニ似タノモアル。

色モ一様デハナイ。ミルヤアラノリノ様ニ綠色ノモノモアレバ、コンブヤアラメノ様ニ茶色ノモノモアリ、テングサノヤウニ紅色ノモノモアル。

吸 咲

ノモアル。一ガイニイフコトハ出来ナイガ、先ヅ綠色ノモノハ淺イ所ニ、紅色ノモノハ深イ所ニ、茶色ノモノハ其ノ中間ニ生エテキルノデアアル。

海藻ハ花ガ咲カナイ。根ノヤウナ所モ、陸上ノ植物ノ様ニ養分ヲ吸取ルタメノモノデハナイ。タバハナレナイヤウニ、岩ナリ石ナリヘクツツクダケノ用ヲナスモノデ、海藻ハ養分ヲ其ノ體ノ全面カラ吸取ルノデアアル。

第二十 マリーのきてん

あわたゞしくかけこんで来た者があります。見れば自國の兵士です。

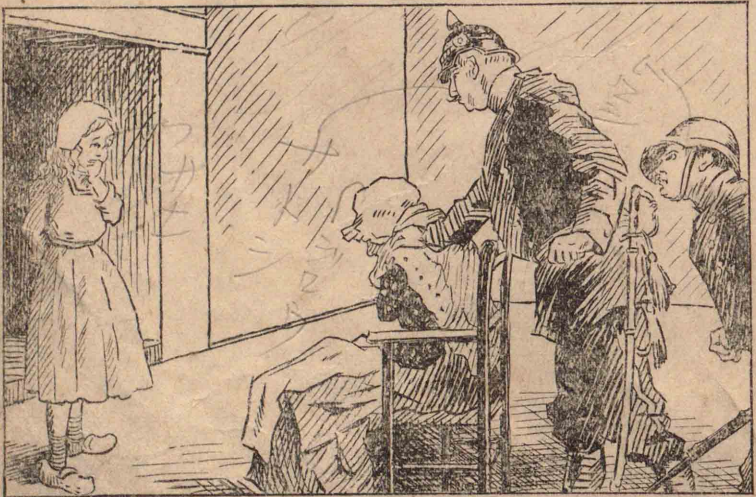
「かくして下さい。敵が追っかけて来ます。」

マリーはどうかしてかくしてやりたいと思ひました。けれども貧しい木こり小屋で、戸棚一つもありません。こまつてゐますと、

「では水を一ばい下さい。」

と兵士が言ひました。マリーが大急ぎでコツ

プに水を汲んで来ました。あまり急ぎましたので、水がいすの上にあつたおばあさんのづきんにこぼれました。  
「あゝ、さうだ。」  
と言つて、マリーはおばあさんのづきんを取つて、兵士の頭にかぶせました。  
「しばらく、うちのおばあ



さんにおなりなさい。」  
 かう言つて、又大急ぎでおばあさんの着物を  
 着せてやりました。肩かけや前だれまで。  
 「向ふむきになつて、此のいすにかけていら  
 つしやい。」  
 「かうですか。」  
 「あゝ、さうです。それから、つんぼのまねをし  
 てね。」  
 此の時どやくと四五人の敵兵がはいつて

なななな

来ました。  
 「おい娘、兵士が一人来たらう。」  
 「いゝえ。」  
 「たしかに來たはずだ。」  
 と言つて、敵はあちこち見まはしましたがお  
 ばあさんの肩に手をかけて、  
 「これ、おばあさん、お前は知つてゐるだらう。」  
 すると兵士のおばあさんが、  
 「はい、よいお天氣でございます。」



敵はどつと笑ひました。さうして、

「ごいつ、かなつんぼだな。」

と言つて、みんな出て行つてしまひました。」

第二十一 二百十日

「よいあんばいだ。此のもやうなら、今日は大したことはあるまい。」

仰

と、おとうさんは朝起きるとすぐ空を仰いでかうおつしやつた。何だか少しむし暑いやうだが、空には雲もなくて、まことによく晴れて

立春 厄農配

ゐた。それが、朝飯がすむと間もなく、稻の葉がさわくし出した。

「やはり二百十日だ。風が出て来た。」

と、又おとうさんがおつしやつた。

おぢいさんにきいたら、二百十日といふのは立春の日から二百十日目の日のことで、此の日はよく大風が吹くから、厄日といつて、農家ではことに心配するのださうだ。

「どうかひどい風にならなければよいが。」

倒 困 棒

とおぢいさんが言つていらつしやつたが、其の中に南の空が黄色になつて、風がだんくはげしくなつて來た。垣根も倒れば、しをり戸も外れる。まして稻田は大波が打つ。

「困つた風だ。」

とおつしやつて、おぢいさんはかぼちや棚につつかい棒を入れたり、菊の鉢を軒下に運んだりされた。

仕合はせに午後は風が弱つた。夕方からは雨

止 重 掛

になつて、風は全く止んだ。

第二十二 助力

夏の眞晝の坂道に、

重き荷車ひきかぬる

人を見かねて、物賣は

になへる我が荷下に置き、

掛聲高くおしてやる。

村の役場に三十年、

勤

樂

勤めつゞけし小使の  
年のよりしがあはれさに、  
人々物を出し合ひて、  
樂なくらしにかへてやる。

共  
助カ

共同助カは人の道、  
おのれの利のみかへりみず、  
力を分ち、物をさき、  
苦しむ者を、泣く者を、

共

加

頼功

信  
歸  
命

助けて共に樂しまん。

第二十三 加藤清正

豊臣秀吉が朝鮮トヨトミヒデヨシへ向はせた先手の大將は加藤清正、小西行長の兩人でした。行長は清正の軍功をねたま、石田三成イシダサネに頼んで、清正のことを秀吉にぎんげんしました。

三成は秀吉のお氣に入りですから、秀吉は之を信じて、清正に歸國を命じました。清正は朝鮮を立つて、伏見フシミへ参りました。當時秀吉は伏

直

見の城に居つたのでございます。  
 清正は先づ増田長盛まさだながもりをたづねました。此の人  
 だけは自分のために心配してくれるであら  
 うと思つたのでございます。ところが長盛が  
 るくく、あいさつもせず、石田と中直りをし  
 なければ太閤たいかの御きげんは直るまいと申し  
 ました。清正は腹を立てて、  
 「神々も照覽せうらんあれ、戦一つ出来ず、人のかげご  
 とばかりいふ石田めとは、此の清正一生中

腹

下手

禁 震 叫

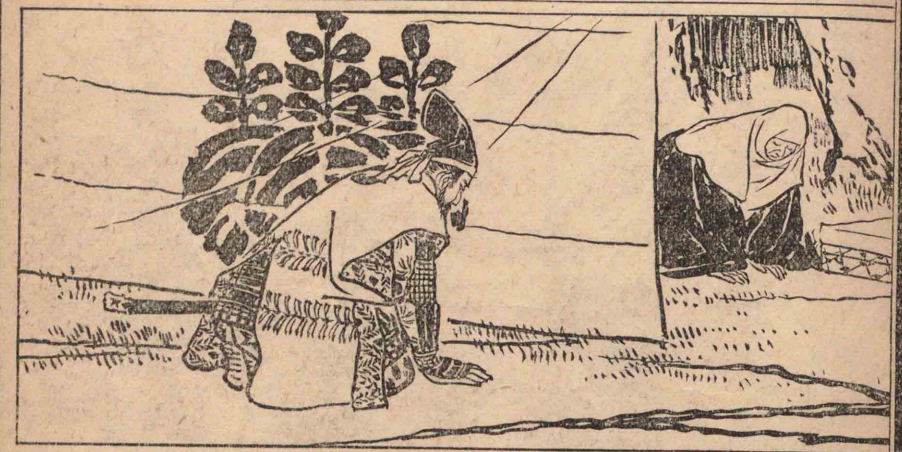
直りは致さぬ。たとひ數年の軍功がみとめ  
 られず、此のまゝ切腹を命ぜられても、石田  
 めとは中直りは致さぬ。  
 といひきつて歸りました。正直者の清正は人  
 づきあひが下手なので、誰一人清正を秀吉に  
 とりなす者がなく、とうく太閤のお目通へ  
 出ること禁ぜられました。  
 ところが或夜大地震が起つて、人家堂塔一時  
 に倒れ、人々の泣叫ぶ聲は天地にひびきまし

幕



た。此の時清正は、地震と共に  
 はね起き、家來の者二百人に  
 梃こぎを持たせて、一さんに伏見  
 の城へかけつけました。夜は  
 まだ深うございます。  
 秀吉は城の庭にしき物をの  
 べさせ、幕やびやうぶでまは  
 りをかこはせ、大提灯おうちんをとほ  
 して、御臺所やおそばの女ど

仕 登



もと居りました。其所へ清正  
 がかけつけました。まだ誰一  
 人城に登つて居りません。清  
 正は大聲で申しました。  
 「加藤清正これまで參上仕  
 る。上様をはじめ皆様、おし  
 の下になつては居られぬ  
 かと存じ、家來ども二百人  
 に梃こぎを持たせてかけつけ



固 某 涙

ました。

秀吉が之を聞いて、

「さてく、早く参つた。」

と心の中で喜びました。さうして清正のやせた姿、日にやけた顔を見ては、怒がとけて、涙ぐみしました。

「お庭先の御門を守る者がございませぬ。某の手で固めませう。」

と清正がいひますと、秀吉はうなづきました。

間もなく石田三成が城に登つて参りました。

「石田でござる。お通しなされ。」

「石田といふ者ださうだ。」

「ずるぶんおそく来たものだ。」

「通さないことにしよう。」

などと清正の家來どもが申します。三成は驚いて、

「今天下に此の石田を知らぬ者はあるまい。御門を守る者は誰か。」

故

「加藤清正の家來でございます。」  
 「何と申す。清正は上様へお目通がかなはぬはず。」  
 「何故にお目通がかなひませぬ。」  
 秀吉が之を聞いて、幕の中から、  
 「もうよい。通してやれ。」  
 といひましたので、清正は  
 「あのせいの低いのが石田だ。通してやれ。」  
 といつて、三成を入れてやりました。

名 召 別 記 勢使

翌日諸大名が伏見城の大廣間へつめました。  
 秀吉は清正を召出して、  
 「其の方は無分別者で、大名になつてもまだ仲間げんくわのくせがぬけぬ。小西程の者を堺さかいの町人とのゝしり、又明國みんこくへの返書に豊臣清正と記したといふが、それはまことの事か。」  
 とたづねました。清正はつゝしんで、  
 「明國の使者、某の陣中に參り、大明の軍勢四

勢

十萬勢はげしくおしよせたるに、日本の大將小西行長は一たまりもなくにげ落ち、もはや朝鮮に日本の武士は一人も居らぬ。生けどつた者は皆かへせ。命ばかりは助けてやらう。』などの廣言。御威光にもかゝはる所と存じ、小西は日本の大將ならず、まことは堺の町人、道案内の者故、にげも致したであらう。此の清正こそはまことの大將、四十萬の軍勢は此所へ向けよ。切つてく切り

案 威言

借姓

感

まくり、其の勢で明の都へおしよせ、四百餘州をやきはらはう。』と返書をつかはしました。が、某は四つ五つの頃から親にはなれて、姓も存じませんので、御威光を借りて豊臣と記したのでございます。と、べんぜつさわやかに申し開きました。秀吉は感心して、

それは皆此の方がやりさうな事。清正はつけひもの頃から、此の方のひざの上でそだ



習 親 差支 刀賞 彼 過等

つたので、何時か見習つたものと見えるも  
と此の方には近い親類の者、豊臣と名のつ  
たのも差支がない。  
といつて、軍功の賞として、清正に名刀をあ  
へました。

第二十四 彼岸

彼岸ハ春ト秋トニアリテ、此ノ頃ハ晝夜ノ長  
サホトンド相等シク、春ノ彼岸ヲ過グレバ、晝  
ヤウヤク長ク、秋ノ彼岸ヲ過グレバ、夜ヤウヤ

季 秋 行 定

ク長シ。晝ノ長クナルニツレテ、氣候ハ次第ニ  
暖ク、夜ノ長クナルニツレテ、氣候ハ次第ニ寒  
シ。故ニ暑サ寒サモ彼岸マデトイヘリ。  
彼岸ハ七日ノ間ニシテ、其ノ中日ニ、春ハ春季  
皇靈祭多クレイサイ秋ハ秋季皇靈祭ヲ行ハセラル。  
農家ニテハ種蒔タネマキ株分クダマ植替ウエカヘ接木ツギキ刈込カリコミ取入レ等  
ヲナスニ、彼岸ヲ目アテトシテ、日ヲ定ムルコ  
ト多シ。

第二十五 電報

「おとうさん、電報が来ました。」  
 「さうか。あけてよんでごらん。」  
 「ハナシデキタイツクルヘンヤスと書いてあります。」  
 「あ、安吉からだ。それでは明日の一番で立たう。」  
 「おとうさん、ヘンとは何のことですか。」  
 「返事のことだ。一つこしらへてごらん。」  
 「アシタノアサーバンノキシヤデタツテイキ

マス。」

「それでは長過ぎる。電報はなるべくみじかい方がよい。もつとつめてごらん。」  
 「アシターバンノキシヤデイキマス。」  
 「それで何字になる。」  
 「十五字です。」  
 「十五字までは三十銭だが、にごりのある字は二字に數へるのだから、それでは十七字になる。十五字までにしてごらん。」



至 末

殿

と思ひます。あのたちで子ども向の  
品をもう五十反、至急お送り下さい。  
代金は二口合はせて月末に送りま  
す。

十月十三日

山口小三郎

高田定吉殿

を は り

昭和三年九月廿五日翻刻印刷  
昭和三年十二月十日翻刻發行

尋常小學國語讀本 卷七

臨時定價金 九錢

著作権所有

著作兼  
發行者

文 部 省

昭和三年九月廿八日  
文 部 省 檢 査 濟

翻刻發行  
兼印刷者  
東京市小石川區指ヶ谷  
東京書籍株式會  
社 代表者 石 川

印刷所  
東京市小石川區指ヶ谷町百三十  
東京書籍株式會社

發行所

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地  
東京書籍株式會社

尋四

高野宗平用

尋四

河野

三三三

